



Wikiで情報共有

堂前 清隆 (株) インターネットイニシアティブ
doumae@ij.ad.jp

●ネットワーク上でのドキュメント共有●

皆さんはネットワーク(インターネット)上でのドキュメントの共有に困っていないだろうか?

ドキュメントにもさまざまなものがあるが、ここでは人間が読むためのドキュメント、たとえば何かの仕様書や、ネットワーク上で公開しているWebコンテンツについて考えることにする。

すでに完成し、更新されないドキュメントであればそれほど問題ではないが、常に更新が行われるドキュメント、しかもそれが大人数で共有されているとなると、各自が保有している版の統一や更新の衝突などについて気を使う必要があり、管理が煩雑となる。

このような問題に対し、従来RCS(Revision Control System)やその発展系のCVS(Concurrent Versions System)というシステムが提案されてきているが、これらはいずれもUNIX的な文化に拠ったものであり、非UNIX環境や、UNIX的な考え方に馴染みがない人間が利用するには少々敷居が高いと考えられる。また、RCSやCVSはもともとがプログラムのソースを管理するために考えられたものであるため、Webコンテンツのようなものに対しては直感的なアプローチがとりにくい。

●WikiWikiWebとは?●

今回取り上げる「WikiWikiWeb」、通称「Wiki」と呼ばれるツールは、先に述べたような問題に対する、RCSやCVSとは別のアプローチの1つである。

そもそも「WikiWikiWeb」とは、Cunningham & Cunningham, Inc.が作成した特定のCGIスクリプト(<http://c2.com/cgi/wiki?WikiWikiWeb>)を指すが、最近

「WikiWikiWeb」の考え方を踏襲した「WikiEngine」が多数実装されており、これらの実装やWikiEngineを用いて運営されているWebコンテンツを総称して「Wiki」と呼ぶことが多い。

これらのWikiEngineは以下のような特徴を持っている。

1. 「WikiName」と呼ばれる識別子によって区別される、複数のページからなるドキュメントを管理する。
2. 各ページはWebブラウザ上で編集することが可能。
3. 各ページは直感的に記述できる簡易言語でマークアップされている。

WikiNameはWikiを利用する上で重要な仕組みの1つだ。WikiNameは「先頭だけを大文字にした小文字のアルファベットで構成された英単語を複数連結したものである」とあり、たとえば「IndexPage」や「MyNotePad」などのような文字列である。

Wikiでは、本文の文中にWikiNameが現れると、その部分を自動的に他のページへのリンクとして表示する。そのWikiNameがすでに存在するものであれば、そのページを参照するためのリンクとなり、WikiNameが存在しなければ新たなページを作成するための画面へのリンクとなる。これにより、利用者はコンテンツ全体の構成を意識することなしに、相互にリンクが張られたコンテンツを作成することができる。

また、各ページの参照画面には本文だけでなく、そのページを編集するための画面へのリンクが準備されており、このリンクをクリックすることでそのとき参照中のページを直ちに編集することができる。

各ページを記述する際には、段落や列挙を記述するための簡易言語を利用することが可能で、これにより、Webブラウザという貧弱な編集環境でもある程度見栄えのするコンテンツを作成することが可能だ。

このように、Wikiは直感性の高い操作方法を特別なソフトウェアを使うことなしに実現している。

●Wikiの利用事例(WikiPedia)●

Wikiの利用形態の1つの例として、WikiPedia (<http://ja.wikipedia.org/wiki/>)を取り上げる。

WikiPediaは、WikiEngineを用いて提供されている一種の百科事典である。WikiPediaは特定の執筆者によって編纂されるものではなく、WikiPediaの利用者自身によって執筆された文章の集合体だ。

WikiEngineを使うことにより、多数の執筆者が共同して作業を行うことができるとともに、WikiPediaの参照者がその内容に誤りを発見した場合など、即座に修正を

行うことができるという利点がある。

●Wikiの勘所●

さまざまな活用が考えられるWikiであるが、その特徴の裏返しとしていくつかの制約や、利用上注意しなければならないことがある。

先に書いたように、Wikiは「誰もが編集することができる」コンテンツであるが、そのため、コンテンツの更新を続けていると、次第にコンテンツの構造や表記が発散してゆき、まとまりがなくなってくる傾向がある。

このような現象に対しては、やはり誰か中心となる人物がコンテンツ全体の方向性を考えながら、適切にまとめてゆく必要があるだろう。

また、「誰もが編集できるコンテンツ」であるということは、悪意を持った人物がコンテンツの一部を削除したり、偽の情報に書き換えたりすることもできるということでもある。

多くのWikiEngineでは、このような行為に対抗するためにコンテンツのバックアップ(履歴)を残すようになっているが、これは悪意を持った書き換え自体を防止するものではない。

そもそもWikiでは、このような悪意を持った行為があったとしても、そのWikiに対してアクティブなかかわりを持っている参加者が逐一コンテンツの復旧を行って行けば、いずれ不心得者は自分の行為が無駄だということに気づき、その行為をあきらめようと考えられている。

しかし、実際問題としてそうそう不心得者に付き合っているわけにもいかない場合もあるので、いくつかのWikiEngineには編集や参照に対して何らかの認証をかけることができるようになっているものもある。また、WikiEngineは通常のhttp上で動作することが多いので、Basic認証やhttps(SSL)など、既存の技術と組み合わせることで安全性を確保することも考えられる。

昨今はWebブラウザがパソコンの最も主要なアプリケーションとなった感があり、その上で利用するアプリケーションが数多く考えられているが、その中でもWikiは応用範囲が広いものの1つだ。



図-1 Wikiの編集画面(例)



図-2 Wikiの利用事例(Wikipedia)

今回は、Wikiのドキュメント共有ツールとしての側面を紹介したが、これを個人用ツールとして使うことも可能である。たとえば、身の回りにある身近なメモをWikiによって管理するという使い方もあるだろう。

参考文献

- 1) Leuf, B.: Ward Cunningham (邦訳yomoyomo): Wiki Way コラボレーションツールWiki, ソフトバンクパブリッシング(株), 東京(2002). (平成16年3月31日受付)